

フィリピンの互助慣行

—日本との民俗社会学的比較—

恩田 守雄

1. 序

本論文の目的は2015年8月と2016年3月に行ったフィリピンの聞き取り調査から、相互扶助に関わる社会慣行を明らかにすることである⁽¹⁾ (表1:「現地調査箇所」参照)。始めに日本の田植えや稲刈り、屋根の葺き替えなどで主に労働力を交換する互酬的行為のユイ、共同作業や共有地(コモンズ)の維持管理などでヒト(労働力)やモノ(物品)、カネ(金銭)を集約しその成果を分かち合う再分配的行為のモヤイ、冠婚葬祭で相手から見返りを期待しない支援(援助)的行為のテツダイについて(恩田, 2006)、それぞれ該当するフィリピンの互助行為を取り上げる。人口が1億98万人(2015年国勢調査)のフィリピンは島嶼国家として無名のサンゴ礁島を含め大小合わせると約7100の島から構成される⁽²⁾。公用語は国語のフィリピン語と英語で80前後あるいは120を超える言語があると言われている。このため統一的な互助慣行に関する語彙を求めることは困難で各言語によって多様な呼称がある。本稿では調査対象地の言語を中心に主要な互助行為を取り上げる。伝統的な互助慣行を浮き彫りにするとともに、同じシマ社会の日本とは異なる多島社会のフィリピンを比較し共通点と相違点を明らかにする。最後にフィリピン固有の互助精神の抽出を試み、その互助社会の将来を展望する。両国の互助慣行の差異を通して、本稿が東南アジアにおける人と人とのつながりや絆について考える契機になることを期待したい^(*)。

2. フィリピンの代表的な互助行為

(1) 互酬的行為

①ルソン島中部

ブラカン州ボカウエ市バランガイ・タムブボン(Togatog, Barangay Tambubong,

表1：現地調査箇所

調査年月	島	州	市町村
2015年8月	ルソン島中部	Bulacan	・ Togatog, Barangay Tambubong, Bocaue ・ Purok 4, Barangay Malite, Malolos
		Pampanga	・ Purok 5, Barangay San Vicente, Mexico, ・ Purok 5, San Roque, Barangay Bitas, Arayat, ・ San cecilio, Barangay Sepung Bulaon, Porac ・ Purok 4, Caldera, Barangay Gutad, Floroda Blanca, ・ Purok 5, Caldera, Barangay Gutad, Floroda Blanca
	ミンダナオ島	Davao del Sur	・ Purok 4 Baranagay Mintal, Tugbok District, Davao City ・ Purok 18, Baranagay Mintal, Tugbok District, Davao City
		Davao del Norte	・ Purok Solid Plain, Barangay Poblacion, Kaputian district, Island Garden City of Samal (IGACOS) ・ Samaka village, Barangay Poblacion, Kaputian district, IGACOS ・ Balangay San Jose, Samal district, IGACOS
2016年3月	ルソン島北部	Benguet	・ King Solomon, Barangay Ambassador, Tublay ・ km 24, Barangay Caliking, Atok ・ Central Tawang, Barangay Tawang, La Trinidad, ・ Lubas Proper, Barangay Lubas, La Trinidad ・ Guitley, Barangay Lubas, La Trinidad ・ Benguet State University, Barangay Balili, La Trinidad, Benguet
	ルソン島南部	Albay	・ Purok 2, Barangay Baybay Centro, Legazpi ・ Purok 7, Barangay San Roque, Legazpi
		Camarines Sur	・ Zone 3, Barangay Santa Elena, Buhí,
	パナイ島	Iloilo	・ Proper, Barabagay Dagami, Maasin, ・ Eco firm, Baranngay Bacan, Cabatuan, Bacan
		Guimaras	・ Barangay Cabalagnan, Nueva Valencia ・ Barangay Guiwanon Island, Nueva Valencia

Bocaue, Bulacan) の60代の男性から話を聞いた⁽³⁾。suyuanは二つの家の関係で米の収穫や家の修理などで労働力を交換するときに使う言葉である(2015年8月聞き取り)⁽⁴⁾(表2:「日本とフィリピン(ルソン島中部, ミンダナオ島)の互助行為の比較」参照)。二軒のbayanihan(共同作業)として行われてきた。この地区には土地は地主小作人関係のカサマ(kasama)の制度がある⁽⁵⁾。同州マロロス市バラングアイ・マリテ(Purok 4, Barangay Malite, Malolos, Bulacan)の60代男性はsuyuanは20年くらい前まであったが今はないと言う(同上聞き取り)⁽⁶⁾。現在は労働力の提供に対して賃金を払っている。お金を必要とする貧しい人がいるので、その人たちを助けるためにも賃労働になった。このsuyuanと同じ意味でlusonganという言葉もある。

パンパンガ州メキシコ市バラングアイ・サンヴィセンテ(Purok 5, Barangay San Vicente, Mexico, Pampanga)の60代男性によると、ここではsuyuanよりもbayanihanの意味でkalukaluという言葉を使う(2015年8月聞き取り)。これは土地を借りて農業をするが、田

表2：日本とフィリピン（ルソン島中部，ミンダナオ島）の互助行為の比較

行為	日本	フィリピン	
		タガログ語（ルソン島中部）	ビサヤ語（ミンダナオ島）
互酬的 行為	ユイ	<ul style="list-style-type: none"> ・suyuan（ブラカン州） ・lusongan（同上） ・kalu kalu（パンパンガ州） ・saupanan（同上） ・sugo（同上） 田植えや稲刈り，家の修繕など	<ul style="list-style-type: none"> ・magtinabangay 相互交換の行為 ・lusong（サマル島） 田植えや稲刈り，果実の収穫， 漁業の網の修繕，家の修理など ・tinabangay（サマル島） 同上
再分 配的 行為	共同 作業 モヤイ	<ul style="list-style-type: none"> ・tulongan（ブラカン州） 灌漑用水や道路清掃など ・saup saup（パンパンガ州） 同上の共同作業 	<ul style="list-style-type: none"> ・bayanihan 一般的な共同作業 ・makipagbisug 同上
	小口 金融 頼母子 無尽	<ul style="list-style-type: none"> ・paluwagan 	<ul style="list-style-type: none"> ・buboay ・paluwagan
支援 （援 助） 的 行為	テツダイ	<ul style="list-style-type: none"> ・tulong 手助け ・abuloy 不幸（葬式）のときの寄付（香典） 組織中心の行為 ・ambag 幸（結婚式）不幸のときの寄付 （祝儀，香典），個人中心の行為 	<ul style="list-style-type: none"> ・tabang 手助け ・abuloy 同左 ・dayong 不幸のとき見舞金を出す行為 ・hikay 結婚式で食べ物を持ち寄る行為

植えの前の水牛による代掻き（magswe）や稲刈りで使う言葉だった⁽⁷⁾。機械化されてこの言葉もしだいに使わなくなった。同州アラヤット市バランガイ・ピタス（Purok 5, San Roque, Barangay Bitas, Arayat, Pampanga）の70代男性の話では，ここでも二つの家族の労力交換をkalu kaluという言葉で言う（同上聞き取り）。昔はこの言葉を代掻きるとき使ったが，今は機械を使うようになり労力提供には賃金を払う。しかし農機具が高くて買えない人は今もkalu kaluという言葉で労力交換をしている⁽⁸⁾。水牛がなくて牛を借りることをsaupananと言い，直接のお返しはしないが将来その機会があれば返礼をする慣行である。同州ポラック市バランガイ・セブンブラオン（San cecilio, Barangay Sepung Bulaon, Porac, Pampanga）の50代女性によると，稲刈りの手助けはbayanihanという言葉を使う。現在はお金を払っているのでこの言葉は使わない⁽⁹⁾。

パンパンガ州フロリダ・ブランカ市バランガイ・グタッド（Purok 4, Caldera, Barangay Gutad, Floroda Blanca, Pampanga）の60代男性によると，kalu kaluという言葉は農業全体で使う（2015年8月聞き取り）。二つの家族の労力交換でもこの言葉を使うが，グループ単位ですることが多い。自分のところでは8家族が4グループあり，各グループで順番に労力交換していく。これは日本のユイ組と同じ仕組みである⁽¹⁰⁾。同州同市同バランガイ（Purok5, Caldera, Barangay Gutad, Floroda Blanca, Pampanga）の50代男性の話では，kalu kaluと同じ意味でsugo（元の意味は使者や使い走りなど）という言葉は1960年代頃

まで使い、見返りとして食べ物を与えたが、今は労力提供に対してはお金を払っている。これは機械化（刈り取り機）され、また現金収入への要求が強くなったことが理由として指摘できる⁽¹¹⁾。

②ルソン島北部

ベンゲット州ツブライ町バランガイ・アンバサドール（King Solomon, Barangay Ambassador, Tublay, Benguet）の50代男性（牧師）によると、野菜、花卉、コーヒーの播種や収穫のとき労働力を交換するが、alluyon（カンカナイ語）とaduyon（イバロイ語）という言葉を使う（2016年3月聞き取り）⁽¹²⁾（表3：「日本とフィリピン（ルソン島北部・南部、パナイ島周辺）の互助行為の比較」参照）。ときにはお金を払うこともある。同州アトック町バランガイ・カリキング（km 24, Barangay Caliking, Atok, Benguet）の50代男性（牧師）と70代の男性の話では、野菜を収穫するとき賃金を伴わない手助けをalluyonとaduyonと言う（同上聞き取り）⁽¹³⁾。

ベンゲット州ラ・トリニダード町バランガイ・タワング（Central Tawang, Barangay Tawang, La Trinidad, Benguet）の50代男性によると、野菜の種を植えるときや摘み取りのときalluyon（カンカナイ語）とaduyon（イバロイ語）という言葉を用いるが、若い人は使わない⁽¹⁴⁾（2016年3月聞き取り）。同州同町バランガイ・ルバス（Lubas Proper, Barangay Lubas, La Trinidad, Benguet）の60代女性（昨年までバランガイ長）の話では、野菜など種まき、耕すときにalluyonとaduyonを使う（同上聞き取り）⁽¹⁵⁾。同州同町の同じバランガイ（Gutley, Barangay Lubas, La Trinidad, Benguet）の90代男性と60代男性によると、種まきやさとうきびの収穫、家を建てるときtimpuyog（イロカノ語）をmanbibinnadang（カンカナイ語）と同様に使い、共同作業をするときにも言う（同上聞き取り）⁽¹⁶⁾。

③ルソン島南部

アルバイ州レガスピ市バランガイ・ベイベイセントロ（Purok 2, Baranagay Baybay Centro, Legazpi, Albay）の60代男性によると、アルバイ湾では二人で網の漁をする（2016年3月聞き取り）。一人でもできるが、網が大きいとき二人です。船の所有者が20%とり、残り80%を二人で分ける⁽¹⁷⁾。南カマリネス州ブヒ町バランガイ・サンタエレナ（Zone 3, Barangay Santa Elena, Buhi, Camarines Sur）の30代女性（バランガイ長）と50代女性によると、今はブヒ湖になっているが10年ほど前自分の土地があった頃田植えや稲刈りでtabangという言葉を使っていた（同上聞き取り）⁽¹⁸⁾。

④ミンダナオ島

南ダバオ州ダバオ市ツグボク地方のバランガイ・ミンタル（Purok 4, Barangay Mintal,

表3：日本とフィリピン（ルソン島北部・南部，パナイ島周辺）の互助行為の比較

行為	日本	フィリピン				
		カンカナイ語 ルソン島北部 ベンゲット州	イバロイ語 ルソン島北部 ベンゲット州	イロカノ語 ルソン島北部 ベンゲット州	ビコール語 プヒ語 ルソン島南部 アルバイ州	イロンゴ語 カラヤ語 パナイ島 イロイロ州 ギマラス州
互酬的 行為	ユイ	・ alluyon 野菜，花卉， コーヒーなど の播種と収穫	・ aduyon 同左	・ timpuyog 同左 さとうびきの 播種と収穫	・ tabang (プヒ語) 田植えや稲 刈り	・ daggaw (カラヤ語) 竹の運搬や 建築，災害 の手助け
再分配的 行為	共同作業 モヤイ	・ manbibinnadang 川の掃除，植 栽塀の修繕， 災害の手助け	・ mantitinudong 同左	・ manbibinnadang 同左	・ rabus 道路清掃 ・ tabang 草刈りなど	・ komon (イロンゴ語) 共有地の管理
	小口金融 頼母子 無尽	・ paluwagan 共済目的の寄付 (災害，病気など) が中心 葬式，結婚式でも 使う言葉	・ paluwagan	ない。	・ paluwagan 現在はない。	・ amutag (イロンゴ語) 共済目的の 寄付 (災害， 病気など) が中心
支援 (援助) 的 行為	テツダイ	・ abuloy ・ dengaw 葬儀の寄付 ・ ambag 幸不幸の寄付	・ abuloy ・ upo 同左	・ abuloy	・ abuloy (ビコール語) ・ ayuda (プヒ語) 同左	・ bulig (イロンゴ語) 葬儀の寄付 ・ limos, donar ギマラス島 葬儀の寄付 ・ amot (カラヤ語) 幸不幸の寄付

Tugbok District, Davao City, Davao del Sur) の30代男性相談員 (kagawad) によれば、ギブ・アンド・テイクというよりもフィリピンではテイクが多いものの、お互いに手助けするときはビサヤ語でmagtinabangay と言う (2015年8月聞き取り)⁽¹⁹⁾(表2:「日本とフィリピン (ルソン島中部, ミンダナオ島) の互助行為の比較」参照)。今は農業でも使われなくなり賃金で支払うことが多くなった。なお相談員制度は住民自治で大きな枠割りを果たしている⁽²⁰⁾。同じバランガイ・ミンタル (Purok18, Barangay Mintal, Tugbok District, Davao City, Davao del Sur) の50代女性の話では、ここでは勤め人が多く農業は少ないが、カカオをつくる家では隣近所の人に手助けをしてもらうときはお金を払っている。

ダバオ近郊の北ダバオ州サマル島バランガイ・ポブラシオン (Purok Solid Plain, Barangay Poblacion, Kaputian district, Island Garden City of Samal <IGACOS>, Davao del Norte) の60代男性 (元プロク長) によれば、協力し合う関係をtinabangayという言葉で言った (2015年8月聞き取り)。これは病気になった人や自分のことができない人

に対して手助けする行為をさす言葉だが、自助を求めることも多い。同じバラングイの50代女性相談員の話では、lusongという言葉で田植えや稲刈りのとき、また椰子の実の収穫で無償の労力交換をしたが、今では賃金を払うことが多い（同上聞き取り）⁽²¹⁾。ただしこの相談員の知る限り漁業では使わないと言う。tinabangayという言葉で、複数の家どうして順番に稲刈りや草刈りを繰り返していく。これは日本のユイ組と同じ仕組みである。稲刈りでは収穫した稲の量によって異なるが、報酬として1ブガッグ（カゴ）分もらった。

サマル島のサマカ村（Samaka village, Barangay Poblacion, Kaputian district, IGACOS, Davao del Norte）の60代男性によれば、lusongという言葉で今日はAさん、明日はBさんというように順番に交代で労働力を提供する。これは日本ユイ組に相当するが、マンゴーやヤシの実の手入れとその周辺の清掃などでグループをつくっている。lusongの語源は皆で話し合って仕事を協力し合うところにある（2015年8月聞き取り）⁽²²⁾。このlusongは労力交換だけでなく、その収穫物であるフルーツを均等に分ける行為も含意している。この点は日本のユイと異なる。メンバーの土地は労力提供者の間で均等にその収穫を分けることが原則である。5人ですとAさんの土地の収穫を5人均等に、またBさんの土地でも収穫を5人均等にする。これはBさんの土地で収穫がよくないときでも他の土地で均等にすることでメンバー全員が平等に収穫の恩恵を得る仕組みである。もとも互酬的行為はヒトの労働力だけでなくモノやカネの双方向性をもっているが、lusongは互酬性と同時に再分配的な行為特性も内包している。また収穫日を決めて勝手にメンバーが収穫しないようにしている。規模の大きいときは100人くらいでしたが、現在自分は3人ほどでやっている。離れた土地であっても親しい人で参加したい者とのlusongをする。昔はヤシの実も小さかったので、他にゴーヤ（にがうり）、たまねぎ、落花生、トマチ、ダイコンなどの野菜をつくっていた。

同じサマル島バラガンガイ・サンホセ（Barangay San Jose, Samal district, IGACOS, Davao del Norte）の50代男性の話では、サマル地区で住民で助け合う行為をlusongと言っている（2015年8月聞き取り）。これは一人の仕事をメンバーで順番に協力して手助けする。農業だけでなく漁業でも網をつくるときlusongです。また沖合で魚を獲るときも協力する⁽²³⁾。

⑤パナイ島

イロイロ州マシムン町バラングイ・ダガミ（Proper, Barabagay Dagami, Maasin, Iloilo）の50代男性（バラングイ長）によると、村からイロイロ市に竹を運ぶときや家を建てる時、災害のときに助け合いの意味をもつdaggawという言葉を使う（2016年3月聞き取り）⁽²⁴⁾（表3：「日本とフィリピン（ルソン島北部・南部、パナイ島周辺）の互助行為の比較」参照）。これはイロイロ州で使われているイロンゴ（ヒリガイノン）語の中でも農

村や山村で使うカラヤ語である。同州カバチュアン町バランガイ・ベイカン (eco firm, Barangay Bacan, Cabatuan, Bacan, Iloilo) の60代男性によると、マンゴの収穫で隣近所、知り合いが手助けする (同上聞き取り)。小さいマンゴはそのとき報酬として持ち帰ることが行われてきた⁽²⁵⁾。

⑥ギマラス島

ギマラス州ヌエバ・バレンシア町バランガイ・カバラグナン (Barangay Cabalagnan, Nueva Valencia, Guimaras Island) の80代男性と40代女性 (高校の先生) によると、ペンのカタチをしているためフィッシュペンと呼ばれる網を使うとき、親戚や友人、隣近所の8人でチームをつくり協力して漁をする (2016年3月聞き取り)⁽²⁶⁾。星と山を見て魚がいるかを知る伝統的な漁法を守っているが、漁獲の50%を船主がとり残り50%を8人で分ける。買い手がいればその人に売るが、いないと8人がそれぞれ魚を自分たちで売る。獲った魚を仕事がない人に分けることもあるが、これは漁に出ない人にも魚を分ける日本の代分けに相当すると言えるだろう。

(2) 再分配的行為

①ルソン島中部

<共同作業>

ブラカン州ボカウエ市バランガイ・タムブボンの60代男性によると、tulunganは灌漑用水を皆できれいにするとき、また屋外に稲を並べていて雨が降ったとき片付けるときなどの共同作業で使う言葉である (2015年8月聞き取り) (表2:「日本とフィリピン (ルソン島中部, ミンダナオ島) の互助行為の比較」参照)。こうした作業に出ないからと言って、日本の過怠金のようなものを払うことはない。この地域には共有地はない。カサマ制度はこの周辺にはないが、まだ残っているところもある。日本の村八分のようなものはない。マロロス市バランガイ・マリテの60代男性からは同様にこの言葉を灌漑用水の清掃や堀を竹でつくる時の共同作業で使うことを聞いた (同上聞き取り)。一軒から一人出るが、出ないとき金額は決まっていないがお金を出す。ここではカサマの制度が残っているため共有地はない。

メキシコ市バランガイ・サンヴィセンテの60代男性によると、ここではtulunganよりもsaup saupという言葉で灌漑用水の清掃や道路整備で使う (2015年8月聞き取り)。アラヤット市バランガイ・ビタスの70代男性の話では、saup saupという言葉を上記と同様の作業で使う (同上聞き取り)。この作業では一軒から一人出すという強制はない。カサマ制度があり、地主には2割納め小作人は8割取る。ここの地主はフィリピン人が多いが、他の地域では外国人 (中国, 韓国) もいる。

ポラック市バランガイ・セプンブラオンの50代女性によると、農業協同組合が環境美

化に取り組み組合員がバランガイと協力して行っている（2015年8月聞き取り）。共同作業は一つの家族から誰かが出るが、必ずしも一人というわけでない。この種の作業に出ないと、また汚れた状態のままにしておくで恥ずかしいので家の前は自分の担当としてきれいにしている。ここでもsaup saupという言葉を使う。同じパンガンガ州フロリダ・ブランカ市バランガイ・ガグタッドの60代男性の話では、灌漑用水の清掃やねずみに毒を与える作業などをsaup saupでする（同上聞き取り）。ここでは個人が土地を持っているが、これらは祖先から受け継いだもので共有地はない。同市同バランガイの50代男性によると、灌漑用水の清掃などでsaup saup がされてきた（同上聞き取り）。一つの家族から一人出るといふ決まりは特にない。ここではカサマの制度はなく、個人で土地を持っている。ただし土地がない人はある人から借りている。

<小口金融>

ボカウエ市バランガイ・タムブボンの60代男性によると、paluwaganは子供たちも教科書や文具を買うためにする（2015年8月聞き取り）（表2：「日本とフィリピン（ルソン島中部、ミンダナオ島）の互助行為の比較」参照）。2週間に一度一人10ペソ出し10人で100ペソ集め、順番に利息なしで受け取る（1ペソ≒2.7円、2015年8月）。大人では一人毎日30ペソ出し月30日で900ペソ、10カ月で9000ペソ集める。これを11月から翌年の9月までの期間貸し、1年後利息なしで返済する。こうした日本の頼母子にあたる小口金融のpaluwaganはバイクの運転手の団体が100人以上である。その受け取りはバイクの若い番号の人から行うが、当然返済能力のある人に使ってもらう。その用途は借金の返済や家の修理などで、一人では大きな金額で集められないとき、また銀行で借りるには少額過ぎるのでpaluwaganをする。これは昔からあった仕組みと言う。

同州同市バランガイ・マリテの60代男性の話では、paluwaganを隣近所の農家とする。毎週200ペソ出し100人で2万ペソ集める（2015年8月聞き取り）。くじ引きで取る順番をすべて決めて、番号が早い人から利息なしで受け取る。銀行から2万ペソ借りると一度に2万ペソ返さないといけないが、paluwaganでは毎週200ペソ払えば済み、面倒な手続きなしにすぐにお金使えるメリットがある。毎週20人ですると200ペソ出して4000ペソ集まるが、同様に利息なしで順番に受け取りが決まる。くじは一度に1から20までの番号を引く。日本の頼母子という言葉は聞いたことがなく、paluwaganは昔からあったと言う。

メキシコ市バランガイ・サンヴィセンテの60代男性によると、paluwaganはここではしない（2015年8月聞き取り）。農業をしているため毎月現金があるわけではない。お金以外の物品でもしない。同州アラヤット市バランガイ・ピタスの70代男性の話では、ここでは農業協同組合もなくpaluwaganもしない。同州ポラク市バランガイ・セブンブラオンの50代女性によると、paluwaganはしないが、公務員は職域団体に貯金をする

人が多い。農協では一人2500ペソの積み立てをして利息もつく（cooperatibaの仕組み）。この他灌漑用水の整備や新しい機械の購入ではバランガイに文書で申請すると、行政が70%団体が30%出すようになっている。

フロリダ・ブランカ市バランガイ・グタッドの60代男性によると、paluwaganはないがグラミン銀行として行っている（2015年8月聞き取り）。これはバングラデシュのグラミン銀行のことで、グラミン以外の名称を使っているところもあると言う。主に主婦が借りて、9人の主婦が連帯責任を負っている。パンパンガ以外の州でも行っている。5000ペソから2万ペソ貸すが、その原資はフィリピンのNGOの出資に基づいている。同市同バランガイの50代男性の話では、paluwaganが毎日、毎週、毎月ごとにされている（同上聞き取り）。特に多いのは毎月で一人500ペソ出して10人でするもので、1から10までの番号が札に書いてあり、1の番号を引いた人から順に受け取る。この順番は一度に決まる。日本のように毎月受取人を入札で決めることはしない。ここでは別にグラミン銀行があり、毎月3%の利息で借りることができる。これは誰でも参加できるが主婦が多い。

②ルソン島北部

<共同作業>

ツブライ町バランガイ・アンバサドールの50代男性（牧師）によると、共同作業ではmanbibinnadang（カンカナイ語）やmantitinudong（イバロイ語）を使う（2016年3月聞き取り）（表3：「日本とフィリピン（ルソン島北部・南部、パナイ島周辺）の互助行為の比較」参照）。聞き取りのとき教会の建て替えを行っている最中で、こうした共同作業は災害のときも手助けで行われる。女性は昼食の用意をしていた。森は共有地（コモンズ）で葬式や結婚式のとき食事の準備で使う牧を皆で利用している。教会の土地は皆で寄附して買った。ここでは日本の村八分に当たるものではなく、高齢者が秩序を破った者に話をして諭すが、話しても言うことを聞かないときはバランガイに言う。

ラ・トニダード町バランガイ・タウングの50代男性によると、木曜日と金曜日にごみを集めるが、これは地域の平和と秩序を維持するためとされる（2016年3月聞き取り）。この他地域の秩序が破られたときは年配者がアドバイスするが、バランアイのオフィスに直接言うこともある。同町バランガイ・ルバスの60代女性の話では、manbibinnadangをまたmantitinudongと言う集団作業を指す言葉で、道路の脇に花を植えるとき、道を掃除するとき、塀を塗るときなどで使う（同上聞き取り）。今は利用していない森林がかつて共有地としてあったが、結婚式などで使う牧を隣のツブライの森林からお金を払わずに持ってきた。同町と同じバランガイの90代男性と60代男性の話では、共同作業ではmanbibinnadangを使う（同上聞き取り）。この言葉で共有地に木を植えて育て、祭りや長老の誕生日などではコミュニティのために牧を集める。困ってい

る人がいれば仕事を与えるなど地域社会で支え合ってきた。

<小口金融>

ラ・トリニダード町バランガイ・バリリ (Benguet State University, Balangay Balili, La Trinidad, Benguet) の30代男性 (大学内の警察官) によると, paluwaganは警察官として職務上しない (2016年3月聞き取り)。年寄りや若い人である人はいる。同州ツブライ町バランガイ・アンバサドールの50代男性 (牧師) の話では, 小口金融としての paluwaganはない (同上聞き取り)。友愛団体のメンバーが結婚のとき男性は一人1000ペソ女性は500ペソ出す。これを paluwaganと言っている。ラ・トリニダード町バランガイ・タワングの50代男性によると, 教会の組織があり女の人がお金を出して食べ物を買ったり野菜を売ったりする (同上聞き取り)。また商売の資金にすることがあり, 小学校の授業料にも充当する。6つの各地区に女性組織があるが, この加入は強制ではない。同町バランガイ・ルバスの60代女性, また山岳集落の60代男性の話では paluwaganはない (同上聞き取り)。

③ルソン島南部

<共同作業>

レガスピ市バランガイ・ベイベイセントロの60代男性によると, 漁に出ると網にペットボトルなどがかかり海もきれいになるので特に海岸の共同作業の清掃はないが, バランガイからの指示で一軒の家から一人出て道路をきれいにすることもある (2016年3月聞き取り)。このときビゴール語で rabus という言葉を使う (表3: 「日本とフィリピン (ルソン島北部・南部, パナイ島周辺) の互助行為の比較」参照)。貧しい人がいればお金を出し, また薬や食べ物, 服などを与えたりする。同市バランガイ・サンロケ (Prok 7, Baranagay San Roque, Legazpi) の40代男性 (バランガイ長) の話では, tabang (ビコール語) はタガログ語の tulongan で, 草刈りや掃除などの共同作業で使う言葉である (同上聞き取り)⁽²⁷⁾。この作業はボランティアで出ないからと言って罰金はない。貧しい人には上記同様, お金を出したり薬や食べ物, 服などを与える。

南カマリネス州グヒ町バランガイ・サンタエレナの30代女性 (バランガイ長) と50代女性によると, 道路の掃除など共同作業に参加しないと200ペソ払うが, rabus という言葉を使う (2016年3月聞き取り)。グヒ湖畔の掃除は共同でなく各自一人ひとりがしている。

<小口金融>

レガスピ市バランガイ・ベイベイセントロの60代男性の話では, paluwaganは30人です (2016年3月聞き取り)。銀行でお金を借りると利息の20%が高いのに対して

paluwaganは2%程度で済む。毎日50ペソ出し1週間ごとに受取人をくじ引きで決める。しかし2010年頃には持ち逃げをする人が多くなったので今はしていない。同市バランガイ・サンロケの40代男性（バランガイ長）によると、paluwaganを今はしていない（同上聞き取り）。合計で2000から3000ペソ集めて行われていたが、持ち逃げする人がいてしだいにやらなくなった。

ブヒ町バランガイ・サンタエレナの30代女性（バランガイ長）と50代女性の話では、ブヒ語もビコール語も同じpaluwaganというが、持ち逃げする人がいてしだいにやらなくなった（2016年3月聞き取り）。1980年代頃までであったと言う。これに代わる制度として小口の金融機関があり、半年で20%の利息を払う。「ファイブ・シックス（56）」と言って5ペソ借りると1ペソプラスして6ペソ返す。貧困者への対応では直接お金を与えるのではなく、大工であれば大工道具を与えるなど仕事ができる機会を与えるようにしている。

④ミンダナオ島

<共同作業>

ダバオ市のバランガイ・ミンタルのバランガイ長によると、共同作業はmakipagbisugと言う（2015年8月聞き取り）⁽²⁸⁾。同じバランガイ・ミンタルの50代女性の話では、bayanihanは共同で働くことを意味するが、農作業でお互い手助けする（2015年8月聞き取り）⁽²⁹⁾。貧しい人の救済はこちらからすると貧困者が自らを哀れむので、向こうから言ってきたときに手助けする。同じバランガイの70代女性によると、島の海岸の清掃をしたので砂浜が白くきれいだった（2015年8月聞き取り）⁽³⁰⁾。親戚どうしで助け合いをするが、基本はあくまで自分です。父が船（yatch, 快走船）をもっていたが、貧しい人が魚がほしいと言ってくると魚を配ることがあった。売るときには干し魚にして売ったりした。

ダバオ近郊のサマル島、のバランガイ・ポブラシオンの60代男性（元プロク長）の話では、共同作業は結合の意味もあるbayanihanと言うが、バランガイの下の単位であるプロクで手助けが必要な住民に対して使う言葉でもある（2015年8月聞き取り）。makipagbisugは仕事のとき使う。同じバランガイの相談員50代女性によれば、ある宗教グループが30haの土地を開拓して半分をグループの長の土地に、残りを住民の土地にして利用した（同上聞き取り）。長の土地では住民が田植えやその他の共同作業をしてその作物を売って長に納め、またコミュニティのために使った。住民個人の土地とは別に長の土地が事実上共有地（コモンズ）の役割を果たしていることがわかる。現在もこの制度は続いていると言う。同じバランガイのサマカ村の60代男性の話では、日本の村八分に相当するものはないが、秩序を破った者にはコミュニティ全体で制裁を決め、本人を呼び出して忠告をして教育する。それでもまた同じことをすれば罰金を求めるこ

とがある。

<小口金融>

ダバオ市バラングイ・ミンタルで警察官をする40代の男性によると、buboayという言葉で、1月に友人や知人、近所の人3人で一人100ペソ出して銀行に預けて12月に利息を得て元金を分配する(2015年8月聞き取り)。この他祭り(カダヤワン・サ・ダバオ<Kadayawan sa Davao>、収穫祭で毎年8月の第3週開催)の前にくじで最初に取り人を決め、そのお金で豚(牛)の丸焼きなどを買うこともある。この場合利息がつくこともあるが基本的にはつかない。同じバラングイの50代女性の話ではbuboayをしない(同上聞き取り)。別の60代女性はpaluwaganという言葉で1月に始めて一人2000ペソ出して10人で20000ペソを銀行に預けて12月利息を得てそれをメンバーで分配する。メンバーは職場の人、公務員、知り合いだが、メンバーが金額を決め保証人となってメンバー以外に貸すこともある。buboayは週1回するので、困っている人を助ける面が強い⁽³¹⁾。そのメンバーが一番多いときで20人いた。同じバラングイの70代女性によると、持ち逃げする人もいたのでのbuboayはやっていない。

ダバオ市バラングイ・ミンタルの30代男性相談員の話では、コミュニティの中でお互いつながりの強いところでは助け合う関係もうまくいっている。ただしお金に関してはモラル(ファイナンシャル・リテラシー)の問題がある。住民はあまり貯金のことは考えない人が多い。企業ではマネジメントできても、コミュニティではマネジメントできないので難しい面がある。行政でも80年代後半から90年代前半にかけてpaluwaganによる貯蓄を奨励し、コミュニティが率先して取り組みをしたこともあったが、最初の世代がうまくいっても次の世代がうまくいかなかったため、現在はpaluwaganを強く言っていない(2015年8月聞き取り)。

ダバオ近郊サマル島のバラングイ・ボブラシオンの60代男性(元プロク長)によれば、ビサヤ語ではbuboayだが、ダバオ周辺ではタガログ語のpaluwaganも使われている。これは利息が銀行よりも安く、人にお金を貸す行為に使う言葉である(2015年8月聞き取り)。もともとpaluwaganは「ゆる(安)い」という意味をもち、行っていた当時は20人で一人1000ペソ出資して、合計2万ペソを利息10%で貸し12月には返済してもらった。貸す対象の人は地域内の誰でもよく、返済能力があるかどうか重要でメンバーの20人が決める。利息を低くすることで、借りる人の負担を減らす。トルコ人やインド人などの外国人から借りるよりも安く借りられると言われてきた。日本語の頼母子について質問したところ、聞いたことがないと言う。このpaluwaganは制度として15年くらい前から行政による主導で始めた。しかし行政の援助はあまりなく、受けていないという意識が強い。この他日本のモヤイ島の仕組みについて話をしたが、これも聞いたことがないと言う。ただし無人島周辺の魚は誰でも自由に獲ることができる。

同じバランガイ・ポブラシオンの50代女性相談員の話では、buboayは20人のメンバーが100ペソ毎月15日あるいは30日に集め、最初にリーダーがもらい、その後はくじ引きで受け取る人を決める（2015年8月聞き取り）。利息はつかない仕組みで昔からあった。職場では給料から天引きで行い、天引きされたお金はリーダーを通して分配される。何かほしいものがあるために声をかけてする場合もあるが、ここでのbuboayは一時期にまとまったお金がほしいときにする共済型と言える。この他メンバーが集めたお金をメンバー以外に貸してその利息をメンバーで分配することがあり、これは利殖型の仕組みと言える。祭りのときにするsosyohayは地域外から来た人たちをもてなすために始まったとされる。これはバランガイ長と相談員が話をし、必要なお金をメンバーから集めメンバー以外に借用証書をつくりそのお金を貸して利息（1ヶ月10%）を得るが、その利息は祭りのために使う。祭りの2ヵ月前には貸したお金を回収する。これは地域社会還元型と言える。同じバランガイのサマカ村の60代男性によれば、buboayは公務員や従業員の人はするが農民でする人は少ない（2015年8月聞き取り）。その理由は農産物の収穫が一定ではなく払い続けることができないためだと言う。

同じサマル島バラガンガイ・サンホセの50代男性の話では、paluwaganには2種類ある（2015年8月聞き取り）。一つはメンバー内で貸す共済型で、これは毎月一人受け取る人がある。10人で一人500ペソ出し10ヶ月で終了する。利息なしで借りることができる人を毎月くじ引きで決める。これに対してもう一つの資金運用のタイプは10人が一人500ペソ出して10ヶ月お金を集める点は前者と同じだが、銀行などに預けてあるいはメンバー以外に貸して（利息は5%）利息を得て10人でそれを分配する。このようにメンバー内では利息をつけないが、メンバー以外では利息を得る違いがある。日本のようなモヤイ島の仕組みも共有地（コモンズ）もない。ただ200人の住民が少しずつお金を出し合って130万ペソで家を建てるため2ヘクタールの土地をもち、集合住宅（200軒）を建てたことがあった。漁師と船のオーナーは漁獲物の半分を市場で売り7対3で分ける。残り半分の魚は自分の食糧として漁師とオーナーで分けるが、魚を隣近所に無料で配ることがある。

⑤パナイ島

<共同作業>

マシン町バランガイ・ダガミの50代男性（バランガイ長）によると、誰でも必要なときに出てきて手助けする（2016年3月聞き取り）。道路のゴミや竹がちらかっているときはきれいにするが、出なくても罰金はない。高齢者も体が丈夫なら出てくる。土地は皆のもので、竹の売り上げは労働力に応じてもらう。カバチュアン町バランガイ・ベイクンの60代男性の話では、誰かの家で困っていれば手助けするがボランティアが基本である。バランガイホールの土地と建物は公有で、ここでの竹の売り上げは提供した労働

力に応じて分配する。

<小口金融>

マシン町バランガイ・ダガミの50代男性（バランガイ長）によると、paluwaganは山村のカラヤ語ではamotと言うが、一般的な寄付でも使う言葉である（2016年3月聞き取り）（表3：「日本とフィリピン（ルソン島北部・南部，パナイ島周辺）の互助行為の比較」参照）。お墓の土地があるので、広い心をもった人は大きな金額を出すのが平均100ペソぐらい寄付する。この言葉はタガログ語やピコール語で積み重ねるという原義をもち、広く不足の事態に対する貯蓄を意味する。葬式のときだけでなく、クリスマスや結婚式でも必要なお金を出す。貧困者への対応では既に述べた助け合いのdaggawの精神で仕事ができるようにする。大工であれば大工道具を与える。カバチュアン町バランガイ・ベイカンの60代男性の話では、paluwaganはイロongo語でamutagと言う。一人毎日500ペソ出して200人で10万ペソ集まる。これを15日間続け生協が窓口になり、給料から天引きされる。最初は病気で困っている人が受け取るが、その後はくじ引きで受け取りを決める。なおサンボアングのtando島ではイスラム教徒のtausug がいて、モスレムが人を殺すとこの島に逃げると言われている。特にsull海では人を隔離するという意味で「救済地」として使われている島がある。

⑥ギマラス島

<共同作業>

ヌエバ・バレンシア町バランガイ・カバラグナンの40代女性（高校の先生）によると、道路清掃はボランティアがする（2016年3月聞き取り）。港の清掃は1年に1回程度で、もともと生活を支えている海なので汚さないよう心がけている。共有地（コモンズ）は基本的にないが、親戚で持っている土地はkomonと言う。これは葬式や結婚式、子供が生まれた場合など必要なとき野菜やフルーツ（バナナ）をとってもよい土地である。これをbuligと言っている（表3：「日本とフィリピン（ルソン島北部・南部，パナイ島周辺）の互助行為の比較」参照）。同町バランガイ・ゲイワノン島（Baranngay Guiwanon Island, Nueva Valencia, Guimaras Island）の40代女性（バランガイ長）と同世代女性（helth worker）の話では、毎週日曜日沿岸の掃除をするが、必ずしも一家から一人出るわけではない⁽³²⁾。

<小口金融>

ヌエバ・バレンシア町バランガイ・カバラグナンの40代女性（高校の先生）によると、paluwaganは教員仲間です（2016年3月聞き取り）。その仕組みを聞いたところ、日本の「ネズミ講」に近い。1500ペソを8人から始める。次々に仲間を増やすことで自分

の取る順番がくるため、自分で加入者を増やさないともらえない仕組みになっている。

同町バランガイ・グイワノン島の40代女性（バランガイ長）と同世代女性（health worker）の話では、paluwaganは2000年くらいまでであった。50ペソ出して船や網、その他必要な漁具を買ったが、管理が悪いためやめた。個人が貧しいので共助の余裕がなく、コミュニティ単位の手助けも少ない。ただ共有する庭園があり、そこでカボチャなどを育て住民がバランガイの仕事をしたときの食事に利用している。

<モヤイ島>

ヌエバ・バレンシア町バランガイ・カバラグナンの40代女性（高校の先生）によると、ヌエバ・バレンシア近海の3つの島Unisan Island, Guiwanon Island, Taklong Island（フィリピン大学の漁業調査地）のうち、グイワノン島の近くに無人島があり、この島（岩礁）の周辺の魚は自由に獲ってもよいとされている（2016年3月聞き取り）。この点をバランガイ・グイワノン島の40代女性（バランガイ長）と同世代女性（health worker）に聞いたところ、ウニサン島の近くに2つの無人島がある。ここは豚小屋をつくり豚を育てたりして自分の生活のために島を利用することができる共有地（コモンズ）のような使われ方がされている。これはモヤイ島と言ってもよいだろう

（3）支援（援助）的行為

①ルソン島中部

ボカウエ市バランガイ・タムブボンの60代男性によると、ビサヤ語のdayongに相当するタガログ語ではabuloy（手助け、援助、寄付）でバイクの団体である（2015年8月聞き取り）（表2：「日本とフィリピン（ルソン島中部、ミンダナオ島）の互助行為の比較」参照）。この言葉は「お布施」を意味するが、金額はいくらでもよく不幸のあった家に出す。abuloyは日本の葬式組にあたる組織中心の行為と言える。この団体としての行為に対して、ambag（援助、寄付）は個人の行為として不幸があった家に見舞金や結婚する家に祝い金を出す。その動詞ambaganの語源は少しずつ貯める意味をもっている。自分で手助けする行為には「自然な」あるいは「自発的な」という意味をもつkusaという言葉もある。マドラス市バランガイ・マリテの60代男性の話では、葬式では農業団体からabuloyの見舞金が出る。家で葬式をするが、狭いと教会です。結婚式ではお金を出すが、招待されたら必ずambaganする。式は家ですることもあるが、会場をレンタルして結婚式をすることもある。

メキシコ市バランガイ・サンヴィセンテの60代男性によると、葬式も結婚式もambagでお金を出したり贈り物をするが、祝儀では金持ちが車を出す場合もある（2015年8月聞き取り）。アラヤット市バランガイ・ピタスの70代男性の話では、葬式の手助けはdamay（共感、同感）の気持ちからする。一軒の家で10ペソ出すが、出さないと罰則が

ある。こうした同情の念を示すdamayanがされないとき、すなわち3回払わないと地域社会から出て行く場合もある。結婚式では親戚や友人が贈り物をする。ポラク市バランガイ・センプラオンの50代女性によると、葬式も結婚式もambagとして金を出したり贈り物をする。結婚式は自分の家で祝うが、お金のある人はホテルで祝うことが多くなった。またフロリダ・ブランカ市バランガイ・ガグタッドの60代男性の話では、葬式はabuloyで弔慰金を出し、個人ではambaganとして葬式や結婚式のとき親戚どうし香典や祝い金を出す。さらに同じバランガイの50代男性によると、葬式はabuloyである。これは地域住民である限りお金を出さないといけない。結婚式では招待された人が「代父」(ninong)や「代母」(ninang)として贈り物をする。このninongが教父で男性の洗礼親に対して、ninangは教母で女性の洗礼親である。

②ルソン島北部

ツプライ町バランガイ・アンバサドールの50代男性(牧師)によると、葬儀ではabuloyとして一軒で2カップ分のお米と20ペソ出す(2016年3月聞き取り)。地元ではdengaw(カンカナイ語)やupo(イバロイ語)という言葉を使う。また結婚式でもお金や食べ物を持ち寄る。アトック町バランガイ・カリキングの50代男性(牧師)と70代の男性の話では葬式や結婚式以外では災害や病気の時にお金を出す。manbibinnadang(カンカナイ語)またmantitinudong(イバロイ語)の言葉を使う(表3:「日本とフィリピン(ルソン島北部・南部、パナイ島周辺)の互助行為の比較」参照)。病気で入院しているときは家族単位で寄付する。結婚式では料理をするため牧を集める。新しいカップル(多くは花婿)が訪問客のために豚を10頭買い味噌と塩も用意するが、これにはかなり費用がかかる。女性は食べ物を準備する。葬式ではabuloyとして3カップ分の米やお金を20ペソ出すが、コーヒーを持ってくることもある。昔の歌(クリスチャンソング)を歌い甲う⁽³³⁾。

ラ・トリニダード町バランガイ・バリリの30代男性(警察官)によると、manbibinnadang(カンカナイ語)という言葉はタガログ語のtulongと同じ意味をもつが都市の人の言葉で、農村ではalluyonを使う(2016年3月聞き取り)。ambag(寄付)をする行為はタガログ語と同じabuloyという言葉を使う。川の掃除でも使うが、葬式や結婚式のときお金を出す行為でbayanihan(相互扶助)と同じ言葉でもある。また同町バランガイ・タワングの50代男性の話では、葬式や結婚式また災害などの非常時でも使う言葉としてmanbibinnadangまたmantitinudong(イバロイ語)がある。これらは掃除をするときにも使う。牧を持ち寄り食べ物をつくり、結婚式のときは既に述べたように豚を丸焼きにして訪問客をもてなす。これに対してお金を出すあるいは野菜やコメ、パン、コーヒーなどの食べ物でお祝いする。葬式のときはabuloyで弔問客がお金を出す。そのお金はエンバーミング(顔直し)や豚の購入に使う。さらに同町バランガイ・ルバスの

60代女性（元バラングイ長）によると、同様に葬式や結婚式ではmanbibinnadangまたはmantitudongという言葉を使う。葬式では牧を持ち寄り、豚を殺して料理する。結婚式では新郎新婦が市場で豚を買い、皆で牧を持ち寄り料理する。また同じバラングイの山岳地帯でも90代男性と60代男性の話では、葬式でabuloyという言葉を使う。パンや米など食べ物を持ち寄りお金を寄付する。牧を集めて豚を殺して料理するのはこれまでと同様で、結婚式もカップルが市場で豚を買い皆で持ち寄った牧で料理する。

③ルソン島南部

レガスピ市バラングイ・バイバイセントロの60代男性によると、葬式では地域によって異なるが、ここでは市から6000ペソ出る。abuloyという言葉を使うがambagも使う（2016年3月聞き取り）（表3：「日本とフィリピン（ルソン島北部・南部、パナイ島周辺）の互助行為の比較」参照）。コーヒーや食べ物を持ち寄り、牧を集めて豚を殺して料理するのはルソン島のほどこも共通する。結婚式では昔は兄弟親戚がお金を出したが、10万ペソもかかるので式をあげない人もいる。同市バラングイ・サンロケの40代男性（バラングイ長）の話では、葬式では市から1000ペソ出る。一般の人はお金や水、ビスケット、コーヒーを持ち寄る。結婚式はホテルですることが多くなった。

ブヒ町バラングイ・サンタエレナの30代女性（バラングイ長）と50代女性によると、葬儀では「助ける」意味をもつブヒ語のayudaという言葉を使い、食べ物や水を出す（2016年3月聞き取り）。結婚式ではpatuminaとして男女がダンスをするとき500から1000ペソ出す。

④ミンダナオ島

ダバオのバラングイ・ミンタルの50代女性の話では、葬式は土葬だが都市に近いのでバラングイホールにお願いして業者を利用することが多い（2015年8月聞き取り）。地域で各家から100ペソ集めるが、出せないときは次のときに200ペソ出すようにしている。同じバラングイの70代女性によると、葬式は手助けを意味するtabangで行う（表2：「日本とフィリピン（ルソン島中部、ミンダナオ島）の互助行為の比較」参照）。家はカトリックだが、メソジストのプロテスタントとして地域住民が5日から6日にかけて通夜をする。abuloyとしてテーブルに贈り物をささげ皆からお金を集めて渡す。結婚式では新郎新婦がダンスをするとき、そのベールに祝う人たちがお金を付けることがある。豚の丸焼きをもらうことがあった。バラングイミンタルの30代男性相談員によれば、事前にお金を集めて葬儀のとき亡くなった家族に渡して支援したが、「担ぐ」という意味をもち棺桶を担いで墓地まで運ぶdayongを仲間で組織するときはバラングイに届け出なければならぬ。これは日本の葬式組に相当するが、事前にお金を集めて葬儀のとき支出して亡くなった家族を助ける。

ダバオ近郊サマル島のバランガイ・ポブラシオンの60代男性の元プロク長の話では、葬式ではdayongという組織がありお金を出す(2015年8月聞き取り)。結婚式では準備を手伝い豚の丸焼きな料理を手助けする。同じバランガイの50代女性の相談員によれば、葬式はdayongで一人100ペソ集めるが、次の葬式のために集めることを繰り返す。まとめ役がいてルールを決めている。結婚式ではお米や牛、山羊、服などを買うお金をもらうが、このとき「今度あなたの娘さんが結婚するときにはお金を返します」と言ってお金を受け取る。tabangは手助けのとき、特に病気のときなどのときに使う言葉である。同じバランガイのサマカ村の60代男性によれば、葬式はdayongという組織を通して一人50ペソ集める。結婚式はhikayですが、これは食べ物を持ち寄って祝う行為である。地域内の結婚は少なく、婿の両親は新婦に対してお金を出す。同じサマル島のバランガイ・サンホセの50代男性の話では葬式はdayongという組織を通してお金を出す。結婚式では準備の手伝いや食べ物を提供する。特に葬式ではkasakit (grief) という言葉を使い、結婚式ではkalipay (happiness) という言葉を使う。

⑤パナイ島

マシム町バランガイ・ダガミの50代男性(バランガイ長)によると、冠婚葬祭の一般的な寄付では先に述べたamotという言葉を使う。葬式ではギャンブル(tong)で1000ペソ分のかけをして利息(もうけ)10%分の100ペソを亡くなった人に渡す(2016年3月聞き取り)。結婚式では既に述べたように男女が踊るときにお金を服につけ、踊りが上手だとさらに多く出しこれをparasalod(カラヤ語)、また男の人は剣を与えられるが、これをbinangon(カラヤ語)と言っている。カバチュアン町バランガイ・ベイカンの60代の男性の話では、葬式ではビサヤ語のtabangに相当するイロongo語のbuligと言ってお金を一人50ペソくらい出す⁽³⁴⁾。お茶や豚肉、鶏肉を持って行くこともある。結婚式では招待状がくれば、グラスやプレートなどのプレゼントを用意する。男女が踊るときにお金を服につけるが、これをpasalod(イロongo語)と言う。

⑥ギマラス島

ヌエバ・バレンシア町バランガイ・カバラグナンの40代女性(高校の先生)によると、葬式ではambagと同じ意味の言葉のlimosという言葉を使う(2016年3月聞き取り)。米やバナナ、コーヒーなどを持ち寄るが、鶏肉とかぼちゃは持ってきてはいけないものとされている。掃除をすると死者が家から出るように、他の者も行ってしまふので掃除はしない。結婚式では花婿が剣を持ち花嫁が踊る。お金(5ペソ~1000ペソ)をピンで止める行為をgalaと言う。妖怪がカップルに近づかないように男の人が別の人に傷つけてその血をカップルにつけることがあるが、これはsinulogと言われている。同町バランガイ・グイワノン島の40代女性(バランガイ長)と40代女性(helth worker)の話で

は、葬式ではlimosと同じdonarと言い、病気のときなどバランガイの職員が各家をまわり少しお金を出してくれとお願いする。この言葉はdonateの寄付を語源とする。結婚式では上述したgalaやsinulogの習慣がある。その他May flower festivalのときは島を囲む船で歌う。

3. 日本の互助慣行との比較

(1) 日本とフィリピンの語彙の比較

日本の相互扶助に関連したタガログ語にはdamayan, pagtutulungan, abuluyanなどがある。damayanは同情を示す行為, pagtutulunganは協力, abuluyanは助ける意味をもつ。このうちabuluyanが相互扶助に直接相当する語彙と考えられる。damayanはdamay (共感, 同感) に基づく行為で, abuluyanはmag-abuluyanとして互いに助け合う行為を意味する。助力の言葉にtulungがあり, この助けるという動詞にtulunganがある⁽³⁵⁾。日本語でも助け合いや支え合い, 手助けなど表現の語彙が多くあるように, タガログ語にも多様な表現がありさらに島嶼地域による言語の差異がある。広く相互扶助の行為を示すときbayanihanも使われるが, これは結合の意味をもつ共同作業をさすことが多い。このbayanはcountryとして地方自治体や市町村を意味するが, nationとして国や国土, 国家, また国民や母国, 祖国まで意味する広い言葉で, bayanihanが特にコミュニティを意味する場合もある。従ってこの言葉はある一つの目的のためにコミュニティ全体で協力する言葉として使われると言えよう。

日本の互助慣行と比較すると, 互酬的行為, 再分配的行為, 支援(援助)的行為いずれもこれらに該当する語彙が認められる。ルソン島中部ではsuyuan (ブラカン州) やlusongan (同州), kalu kalu (パンパンガ州), saupanan (同州), sugo (同州) が使われている。ここで一般的な手助けの行為とユイのような特定の労力交換の場面で使われる言葉を区別する必要があるが, 地域によって多様な呼び方がされるのは日本も同じである(恩田, 2006)。ルソン島北部ベンゲット州のカンカナイ語ではalluyonという言葉で野菜, 花卉, コーヒーなどの播種と収穫の労力交換がされ, イバロイ語ではaduyonが使われる。イロカノ語ではtimpuyog と言い, さとうびきの播種と収穫で用いられる。今回の聞き取り調査では直接確認できなかったが, 互酬的行為で直接日本のユイに相当するのはピコール語ではhonglonan で, これは稲刈りや家の建築で他人のために「お互い様である」という合意でされる労力交換でピコール地方の古くからの習慣とされる。ルソン島南部アルバイ州のプヒ語ではtabang が使われる。パナイ島イロイロ州ではdaggaw (カラヤ語) と言って, 竹の運搬や家の建築また災害の手助けをするときに使われてきた。

再分配的行為では, ルソン島中部のtulungan (ブラカン州) やsaup saup (パンパン

ガ州)という言葉で地域の共同作業をする。ミンダナオ島ではbayanihanがまた地域によってはmakipagbisugが言われてきた。ルソン島北部ベンゲット州のカンカナイ語とイロカノ語ではmanbibinnadangが道路清掃、植栽、塀の修繕などの共同作業のとき使われている。日本の頼母子や無尽に当たる小口金融はミンダナオ島のダバオやサマル島ではbuboayと言うが、フィリピン全体でpaluwaganが一般的である。paluwaganはパナイ島のイロン語ではamutagと言うが、これは組織単位の共済目的の貯蓄で病気で困っている人などが最初に受け取るが、その後はくじ引きで分配する。paluwaganの仕組みは同じメンバー内の救済型とメンバー以外に貸す利殖(資金運用)型に分かれる。前者は利息がつかない場合が多い。この点は日本とは異なる(恩田, 2006)。都市部では小口金融として利息目的が強いが、農村や小島になると共済目的中心で生活困窮者や不慮の事態に陥った困窮者に対する救済型が多い。ただしパナイ島対岸のギマラス島の一部のバランガイでは「ネズミ講」の仕組みで行われている。

支援(援助)的行為では、abuloyがタガログ語以外でも葬儀のときの手助けとして使われている。これはambag(寄付)する行為で、どちらかと言うと組織中心の行為とされる。これに対してambaganは不幸のときだけでなく祝儀の結婚式での寄付行為を意味し個人中心の行為である。ミンダナオ島のビサヤ語では、dayongが不幸のとき見舞金を出す行為であると同時にまた組織を意味することがあり、これは日本の葬式組に相当するだろう。ルソン島北部ベンゲット州ではabuloyが使われるが、カンカナイ語ではdeng-aw、イバロイ語ではupoを用いる。ルソン島南部のアルバイ州ではピコール語でもabuloyと言うが、プヒ語ではayudaが使われる。パナイ島イロイロ州ではbulig(イロンゴ語)やamot(カラヤ語)が手助けや寄付として用いられ、ギマラス島ではbuligの他にlimos, donarという言葉が葬儀で使われる。

(2) 多島社会の互助慣行

日本のように北海道、本州、四国、九州という大きな島を中心にその周囲に離島をもつシマ社会と異なり、大小様々な島々が拡がる島嶼国家のフィリピンを日本と同じように捉えることは難しい。この多島社会は先に指摘したように言語の多様性を特色とする。日本のように閉鎖性と開放性という二つの相異なる傾向をもつ点では、閉鎖性が少なく島外から受け容れがされてきたように思われる。それは逆に島外に行く女性の海外出稼ぎに示されている。フィリピン人女性の夢(フィリピンドリーム)は外国人と結婚するか、外国に行って働くこととされる。2015年の失業率(フィリピン国家統計局)は6.3%とされるが、親の面倒や兄弟を学校に行かせたい気持ちが強くと、実質失業率が6割とも言われ家族の中で一人働いていればいいほうと言われている。こうした中で国家予算1兆6千億円の中で占める800万人の出稼ぎ者の送金は大きい。在日フィリピン人(2015年末法務省統計)は中国、韓国・朝鮮に次ぐ第3位で約23万人いる。

ルソン島を中心とした社会ではマニラ人が「ビサヤ」と言ってビサヤ諸島出身者を小馬鹿にすることがあるが、これは第二の都市ダバオに対しても同様な扱いがされている。逆にマニラ人に対しては都会の冷たさを感じる地方の人は多い。人口が1288万人（2015年フィリピン国勢調査）のマニラ首都圏の「中心」から離れた近郊になるにつれ互助慣行が健在であることは聞き取り調査を通してわかる。しかし共有地（コモンズ）がほとんど見られないのはそれだけ共益意識が希薄なことを暗示している。ただしギマラス島では親戚がkomonという土地をもち、葬式や結婚式、子供が生まれたときに野菜や果実を自由採取することが認められてきた。これは血縁関係にある同族所有の土地であり、地域住民が所有する共有地ではない。ギマラス島から小舟で行ったGuiwanon Islandの近くのUnisan island周辺の2つの無人島ではモヤイ島のような使われ方がされ、小屋で豚を育てるなど自分の生活のために島を利用することができる。また無人島周辺の魚を自由に獲ってもよいとされる。しかし総じて多島社会の集団主義は日本ほど強くなく、個人単位の活動が中心となっている点は限られた調査ではあるが言えそうである。

「互助慣行の移出入」という点で日本とフィリピンとの接点はあるだろうか。同じシマ社会でありながら、既に述べたようにまた後述するように大きく異なる。インドネシアとは異なり、日本が統治したとき隣組を強要し、ゲリラの反発を招いたと言われている。韓国や台湾と異なり直接植民地化（国家化）したのではなく、日本人と現地人との分離統治によって互助慣行の社会的移出入はほとんど見られない。従って互助慣行では韓国や台湾のように小口金融の頼母子を現地人が言葉として知っているわけではない。ただ日本語の「好き」という言葉が現代のフィリピンに入り「お店好きです」というように言われ、「すき (suki)」がそのまま使われていることを20代の若者から聞いた。外来語の自国語への摂取と言える。アニメ文化による浸透はあっても、日本との互助慣行の接点は東アジアのように見られない。マニラ麻などの入植で築いてきたフィリピンにおける伝統的日本人社会も一般企業の進出は別にして、ダバオの日本人会でも日本から来る定年退職者の移住は見られるものの、かつてのような日本人どうしのつながりは希薄であると言う⁽³⁶⁾。こうした声から判断すると、フィリピンの多島社会、特にフィリピン人の女性と結婚あるいは事実上婚姻関係にある家族では逆にフィリピン人の家族志向が浸透しているように思われる。

4. 互助慣行と国民性

(1) 相互扶助の精神

限られた聞き取り調査の中で判断するには限界があるものの、ここでは既述したフィリピンの互助慣行について国民性と関連させながらまとめることにしたい。フィリピン人は家族関係が強いと言われているが、これは日本に限らずこれまで調査してきた韓国、

中国、台湾の互助慣行から東アジア全体に言える（恩田，2012: 2013: 2014: 2015）。日本では家族がもつタテの親子関係に基づく「イエ集團の原理」と村落がもつヨコの近隣関係に基づく「ムラ社会の原理」が日本の社会を規定し、他の企業や行政など機能集團に浸透している（恩田，2016）。「イエ集團の原理」では家族がもつ成員間の交流を示す「感情融合」（心理的安定）と子供を家族以外の環境に適応できるようにする「社会化」の機能のうち、前者は家族という社会の最も基本となる単位が担う重要な機能で、これが相互扶助の原型であり、それが社会に反映されることで互助社会が形成されると言ってもよいだろう。この点東アジアに共通する家族主義は東南アジアのフィリピンにも当てはまる。ただし家族を超えた集團主義はそう多く見られるわけではなく、ギブ・アンド・テイクというよりもテイクが多いことから個人主義が強いと言えるだろう。これは宗教行為として常に神に対して一対一で向き合う姿勢とも関係があるように思われる。この点日本人は自分の良心に向き合うことはあっても宗教的な懺悔は少なく、集團としての凝集性は日本人のほうが強い。

フィリピン人の家族志向がそのまま隣保共助に結びつくかと言えば、そうではないところが散見される。インタビュー調査で明らかのように、経済的に豊かでない日々の暮らして忙しく、他者への配慮などできないのが現状であろう。これはBahala na（バハラナ）という言葉に示されている。bahalaは「責任、義務、負担、保護、世話、管理」をさすが、その意味は「何とかなるさ、どうでもいい、運に任せる」で、現状をそのまま受け容れるフィリピン人の生活態度を示す言葉とされる⁽³⁷⁾。この語義は「神様が何とかしてくれる」から転じたと言われ、タガログ語もビサヤ語も同じである。マニラを中心としたルソン島中部では一部地域（パンパンガ州メキシコ市）によってBala na（バーラナ）というところもある。

フィリピン人は互助集團としては脆弱でも、地域社会で行祭事をするときはそれなりにまとまる。都市では希薄化しているが、農村ではまだ冠婚葬祭に伴う伝統的な互助慣行が行われている。特に人口減少がそれほど見られない点で、行祭事を通して世代交代がうまくいっているように思われる。ルソン島北部ベンゲット州ラ・トリニダード町バラングイ・ルバスのGuitley地区では91歳のカンカナイ族老人の誕生祝いを集落全体で行っていた。そこでは慶事でよく行われる伝統的な豚の丸焼きによる食事が饗応され、誰もが老人の長寿を祝福していた。またパナイ島のマシム町バラングイ・ダガミのイロン族の山村では、助け合いの意味をもつdaggawの精神で仕事を分け合うなど隣保共助が強い。その一方で若い人で互助慣行の言葉を使わないあるいは知らない者が多いのも現状である。このように大きな島でも内陸部ではまだ互助慣行が見られ、また小さな島では共同作業の「バヤニハン（bayanihan）の精神」が健在である。これはコミュニティのための共益労働である伝統的な「バタリサン（batarisan）の精神」でもある（Quibuyen, 2011）。それでも限られた支え合いでは規模が小さいだけに公助に頼ること

で、また自らの生活で手がいっぱい自助によって、他者との協力によって得られる共助への関心は希薄と言ってもよいだろう。

(2) 多言語社会のつながりと絆—連帯と共生のゆくえ

島嶼国家フィリピンは互助慣行をめぐる言語が多様性に富む。既に述べたとおり互酬的行為、再分配的行為、支援（援助）的行為いずれも地域によって多様な呼び方がされている。この多様性の中でもpaluwaganという小口金融やabuloyという不幸があったときに出す甲事の行為は今回の聞き取り調査ではほぼどの地域でも共通する言葉として抽出できた。これは物理的に離れている多様な社会でありながら、また多言語社会であっても島嶼国家として統合されている面もあると言えるだろう。前者のpaluwaganは東アジアでも見られた小口金融としてもともと生活に困っている人を助ける自然発生的な慣行として捉えられるが、それが地域によって様々な共助の仕組みを生み出してきた。また後者のabuloyとして死者を送り出す儀式も地域によって異なるが、どの地域でも共通語として存在するのは人を悼む行為自体は人間の本性としてコミュニケーションの必要性とも関係があるだろう。フィリピンは「複合社会」と言われる（Steinberg, [2000] 2000, 74-76頁）。しかし互助慣行という点からは「単一社会」という側面も見出し得る。

先に東アジアにも共通する家族主義がフィリピンにも当てはまり、家族を超えた集団主義はそう多く見られるわけではなく個人主義が強いと述べたが、ただベンゲット州ツブライ町バラングイ・アンバサドールのキングソロモン地区の教会の建て替え工事のように男性が「村仕事」に従事し女性が昼食の用意をするなど、地域社会の連帯と共生は健在である。この教会の土地は皆で寄付して買ったものである。森林は共有地として維持され、葬式や結婚式では食事の準備で使う牧を皆が利用できる。また小さな島ではまだ生活様式が都市化されない分互助慣行が残っている。既述したように自分の生活で余裕がなく共助は強くないが、ギマラス州ヌエバ・バレンシア町バラングイ・グイワノン島周辺のユニサン島は近くに2つの無人島がモヤイ島のような使われ方をされている。しかしその一方で同一民族内では連帯と共生が維持されても、多様な民族間の融和は難しいのが現状である。ベンゲット州ラ・トリニダード町バラングイ・タワングで行われた祭り（2016年3月5日開催, 12th Annual Agro-Eco Tourism Festival）のテーマは *extending the avenue of equal opportunity in sustaining unity for healthier community* であった。これはKasabatのカリング族の他にSiglat, Taraki, Tinunudanの3つの山岳民族が参加し、異なる民族の統一を意識させる試みでもあった。実際民族衣装を身にまとった現地住民がそれぞれの民族舞踏を演じ、多様な文化をアピールする場となった。行政単位として統合されていても、民族間の融和が課題であることがうかがえる。これはより大きな単位としてナショナル・アイデンティティとエスニック・アイデンティティの問題でもある。

日本人とフィリピン人の違いとしてミンダナオ島ダバオの日本人会の話から推測すると、フィリピン人には「以心伝心」がないと言う。日本人男性の介護をフィリピン人女性が行っても、男性からはよく思われていない。同じ日本人なら気持ちを察してもらえが、気配りが足りないためとされる。フィリピン人に限らずこまやかな感情に欠ける点はよく指摘されるが、四季の変化を反映した繊細な感情をもつ日本的な行為を期待するほうが無理と言えるだろう。仕事で後片付けができない、あるいは整理整頓をしない点も指摘されるが、そこに日本式スタイルを導入しても難しい面がある。この点でも日本人は全体の秩序を重んじる集団主義だが、フィリピン人は個人主義で家族（親戚）以外の集団としてのまとまりは少ないと言える⁽³⁸⁾。このように集団主義は弱いものの、家族を単位とした地域社会の連帯と共生に基づく共助がどうなっていくのか、次に地域固有の問題を通して考えたい。

(3) 地域社会の問題

①ルソン島中部

ブラカン州ボカウエ市バランガイ・タムブボンの60代男性によると、若者の流出は少ないが、若い人に野菜や殺虫剤のまき方など知らない者がいるためそうした技術を教えたい（2015年8月聞き取り）。また貧しい人が土地をもっていないことが問題である。同州同市バランガイ・マリテの60代男性は貧困問題が大きく、その対策として教育が必要で一つの家族で一人大学卒業者を出すことが目標としてあるが難しい。ここでは若い人が都市に出て行くこともあるが、まだ50代が農業をされていて世代継承がされている。パンパンガ州メキシコ市バランガイ・サンヴィセンテの60代男性も貧困が一番大きな問題で政府（行政）はほとんど何もしてくれない。ここの若者は農業を受け継ぐ人がいて地元で満足している。同州アラヤット市バランガイ・ピタスの70代男性は家族の中で働かない者がいることが問題だとする。地域の若者は地元で農業をしている。同州ポラック市バランガイ・セブンブラオンの50代女性は若い人が農業をしないあるいはしたくないことが問題だとし、土に触れて汚れることを嫌う若者がいる。ここはカサマの制度はなく自分の土地を売る人がいる。パンガンガ州フロリダ・ブランカ市バランガイ・グタッドの60代男性は特に農業で米の値段が独占されている点を指摘している。米の値段をあげることができず殺虫剤と肥料の値段も統制できないことを批判している。このため若い人が農業をやらたがらないため人口減少も生まれている。同じバランガイの50代男性によると、道路整備や清掃のときに協力してくれないことが問題だと言う。ここでは若者が都市に出ることは少なくない。このように若者が農業を受け継ぐところもあれば、都心に近いところほど農業離れがおきている。

②ルソン島北部

ベンゲット州ツプライ町バラングイ・アンバサドールの50代男性（牧師）は困っている人がいれば農業など仕事を与えるが、ここで一番の問題は仕事がないことで海外に仕事を求めて出て行く人がいる。牧師の息子は日本に行ったと言う。またジープニー（乗り合いバス）が少なく交通手段も不足している。さらに高地のため水の確保（上水道）が問題で下水道はそのまま流している。子供の教育では小学校がバラングイで5つあるが、中学校はないので他のバラングイにいずれもジープニーで通っている。日本の少子化のことを話すと、産児制限がないので女性が子供を多く産む。特に70年代と80年代は子供が多かった。同州アトック町バラングイ・カリキングの同じく牧師をしている50代男性はやはり仕事がないことが一番大きな問題でこの他水も十分ではない。農地は棚田で土壌がよくない点も指摘している。ここでは小学校は4つ中学校が1つある。高齢者については各世代が順に世話をし介護の施設もある。

同州ラ・トリニダード町バラングイ・タワングの50代男性によると、一番の問題は水の供給（家庭の水）で井戸水はあるがきれいではない。その他仕事の確保や交通問題、バラングイに小学校は1つあるが中学校はないので隣のバラングイに行く教育環境も指摘している。同町バラングイ・ルバスの60代女性（元バラングイ長）は大きな問題として市場に農産物を運ぶ道路が整備されていない点を指摘している。この他水の供給。灌漑用水、失業、交通問題を取り上げた。ここは小学校が1つ中学校が1つある。人口は女性が子供を多く産むので高齢者が相対的に多いとは言えない。同じバラングイの高地に住む60代男性は家族構成は5人から7人くらいで若い人が都市に出ることもあるが、人口は少しずつ増えているので日本のような過疎は少ないと言う。バラングイの小学校までは30分ほどかけて歩いて行くが、一番の問題は交通で高地のため病気やお産でラ・トリニダードやバギオまで行くときが大変な点を指摘している。水は山の自然水を利用しているため特に問題はない。

③ルソン島南部

アルバイ州レガスピ市バラングイ・ベイベイセントロの60代男性は人口は増えているが、薬（ドラッグ）の問題が一番大きいと言う。同市バラングイ・サンロケの40代男性（バラングイ長）もドラッグの問題を指摘している。これはレガスピ市のような大都市固有の問題と言える。この他失業問題や学校の退学もある。なおこの地域では住民組織として全世帯が入るHome Owners Associationがあるが、そこでは家庭の平和と秩序を中心にルールを決めて守っている。都市とは言え、まだ困っている人には食事を用意したりして手助けする慣行も残っている。南カマリネス州ブヒ町バラングイ・サンタエレナの30代女性（バラングイ長）と50代女性によると、一番の問題はブヒ湖の洪水で被害が大きい点である。その他失業問題もあるが、女性が子供を3人から4人産むため人口

は増えている。なおこの住民組織も女性、高齢者、青年、学校の先生、漁師などがあり活動が行われている

④ミンダナオ島

ダバオのバラングイ・ミンタルの50代女性とその友人の60代女性は雇用の問題が一番大きく、保健医療施設も不足している。20代の男性は家の前のむかみみの道路の整備などプロク内で協力しないことが問題だと言う。都市部だけに住民間のつながりが希薄なところがある。同じバラングイ・ミンタルの70代女性に日本の支え合いについて話すと、日本は助け合うことが多いように思うがフィリピンでは個人の力に頼むことが多いと言う。このバラングイ長に公助、共助、自助の関係について質問すると、現在公助と共助はいい関係にあると言う。たとえば Dengue 熱などの衛生面では情報提供を行政がするが、実際の行動はコミュニティの人たちがする。行政と協働しながら住民が問題を解決している⁽³⁹⁾。同じバラングイの30代男性相談員によれば、地域の住民組織はNGOとのパートナーシップの関係をもちまちづくりに取り組んでいる。バラングイ長とは対照的にむしろ一般住民の態度が問題で、Dengue 熱への対応ではその都度一過性の対応に終わり継続的な対応ができない点を指摘している。このように大都市ダバオのようなところでは地域住民間の連帯と共生が大きな課題となっている。

ダバオ近郊のサマル島では、バラングイ・ポブラシオン60代男性（元プロク長）が指摘するように、島内の公共事業（道路工事）もあるが仕事がないことが一番の問題である。若者がダバオに行ってアルバイトをするが、また戻ってきて漁をするため後継者はいるが、漁業だけでは生活できないので自分の土地で農業もするのが現状である。ただ台風など天候に左右され、漁業ができないことが不安である。同じバラングイの50代の女性相談員によれば、一番の問題は水で水源の泉からそのまま利用しているが浄水場がなく、衛生面での不安が大きい。同じサマル島でも内陸部のサマカ村に住む60代男性の話では、Sagunion Pangkabataanという若者組（メンバー約100人）があり、祭りなどで中心的な役割を果たしているため世代間の継承はうまくいっている。フィリピン全体でこの種の組織があり、税の4割が若者のためにとってあると言う。しかし生活をよくしようとしてもお金が不足し食べていく分しかない。若い人が島外に出て行っても将来生まれたところに戻る人が多い。別のバラングイ・サンホセの50代男性は漁業ではまだ若い人の仕事はある、一番大きい問題は雇用だと言う。

⑤パナイ島

イロイロ州マシン町バラングイ・ダガミの50代男性（バラングイ長）によると、一番の問題は貧困問題で収入が少ない。子供は学校に行くよりも仕事をしてお金を得ている⁽⁴⁰⁾。このため若い人が収入を求めて町に出ることもある。その他では竹を運ぶのに

トラックを使うが道路事情がよくない。人口は子供を多く産むため（平均12人）、日本のような少子化の問題はない。なかには16人の子供がいる家族もある。同州カバチュアン町バランガイ・ベイカンのような都市では60代男性が指摘するように、雇用は一般的に65歳が定年だが希望すればその後も働けるが、一番の問題は収入である。

⑥ギマラス島

ギマラス州ヌエバ・バレンシア町バランガイ・カバラグナンの40代女性（高校の先生）が一番の問題は経済（収入）で水の供給も不満であると言う（一つのコンテナーに7ペソ払う）。自分は15人兄弟姉妹で女性はだいたい8人くらい産むので人口は増えている。同町でも離島のバランガイ・グイワノン島では40代女性（バランガイ長）と40代女性（helth worker）が指摘するように、一番の問題は水の供給である。また井戸水は6ヶ月に1回点検しているが、衛生状態が問題である。重い病気ときはBantay Dagat（海上警備艇）が病人をギマラス島に運ぶが、搬送に時間がかかり亡くなることもある。お産は島で済ませている。この他電気は夜だけ使えるため（16時から24時まで）不便である。女性はだいたい4人から5人くらい産むが、島から出ていく人がいるため全体として人口は減っている。一般にフィリピンでは女性が産む子供の数は多く、日本のような人口減少問題はないと言えるが、減少はむしろ社会減としての地方から都市への移住によるところが大きい。

5. 結語

フィリピンの互助慣行について日本同様互酬的行為のユイ、再分配的行為のモヤイ、支援（援助）的行為のテツダイの等価物を見出すことができる。ただ多島国家フィリピンでは地域によって互助行為をめぐり多様な語彙が見られる（表2：「日本とフィリピン（ルソン島中部、ミンダナオ島）の互助行為の比較」と表3：「日本とフィリピン（ルソン島北部・南部、パナイ島周辺）の互助行為の比較」参照）。その差異として小口金融の頼母子や無尽のように利息目的の射幸心をあおるような仕組みは東アジアの韓国や中国、台湾ほど強くないことが限られた調査ではあるが明らかになった。paluwaganとして利息をつけないでメンバー間で貸借を行う行為にそれは示されている。

地域社会で昔から行われてきた互助行為を伝統的とするなら、まだフィリピンには都市でも近郊農村地帯、また大きな島に近接した中規模あるいは小さな離島では伝統的な互助慣行が健在である。農作業を始め冠婚葬祭で地域住民間のつながりや絆が見られる。その互助ネットワークは「背伸びをしない無理をしない自分の生活に見合った可能な範囲での支援や援助」ということにつきる。過剰な期待を他者から期待しない点は「何とかなるさ、どうでもいい、運に任せる」という「Bahala na（バハラナ）の精神」に表

れているように思われる。

日本と同じシマ社会とは言えない点は集団としての共助が強く見られないところから指摘できるが、貧しさからくる自助で手いっぱいの生活状態が一因として指摘できる。しかしその一方で葬儀や結婚式では伝統的な儀式を維持しながら共助を保っている。特に都市の郊外や離島ではまだ各自の能力に応じた範囲で相互扶助がされていることがわかる。ただ家族や親戚を超えた単位での共同作業はバヤニハン (bayanihan) やバタリサン (batarisan) に基づいているとは言え、地域社会でそれほど多くなく、また共有地 (コモンズ) がほとんど見られない点から判断しても共助は日本とは異なり強くないことがわかる。この差異は伝統的な社会から近代的なそれへと発展する過程で、市民一人ひとりの権利義務意識の自覚に基づく市民社会の成熟度と関係しているように思われる。日本は伝統的な共助を活かしながら市民社会における新しい共助へと発展しつつある。この点フィリピンではもともと共助自体の脆弱性からどのように公助と自助の関係を築きながら生活を向上させようとするのか。日本同様今後フィリピンの農村社会でも互助慣行が衰退していく傾向が強まると、個人主義の浸透からさらに共助が弱くなることが予想される。この点を日本の動向と照らし合わせながら注視していきたい。

*本論文は、平成27 (2015) 年度から平成31 (2019) 年度の科学研究費助成事業の学術研究助成基金助成金による「日本と東南アジアの互助ネットワークの民俗社会学的国際比較研究」(課題番号15K03860, 基盤研究 (C)) の成果の一部である。

注

- (1) 2015年8月の調査ではアテネオ・デ・ダバオ大学のTom Jan Salavia君とフィリピン大学のAvie Kent Santos君、2016年3月の調査ではKaren Joy Awacanさん、Naga市日本語学校インストラクターのJoefren D. Martinezさん、セントラルフィリピン大学のOliver John AJ Dulay Gayonoché君に通訳をしてもらった。
- (2) 言語学的にはオーストロネシア語族に属するが、マレー系が主体で他に中国系、スペイン系およびこれらとの混血並びに少数民族がいる。宗教はASEAN唯一のキリスト教国で国民の83%がカトリック、その他のキリスト教が10%、イスラム教は5%だが、ミンダナオ島ではイスラム教徒が人口の2割以上を占める。
- (3) フィリピンの行政区分は州 (province), 市 (町) (municipal), 村 (行政村) (barangay) 自然村 (sitio or purok) がある。バラングイ (タガログ語barangay) は「自治区」で最小の地方行政単位 (コミュニティ) を構成する。BrgyやBgyと略される。一般にバラングイ長の任期は3年で選挙で選ばれる。このバラングイの下の単位にpurokまたはsitioがある。またかつてのマルコス大統領時代の旧単位であるbarrio (タガログ語baryo) という単位が残っている地区もあるが、このバリオは90年代以降バラングイとなり今日に至っている。purokは英語ではward (区) になる。プロク長の任期は3年でバラングイ長が指名する。barangayが行政村とするなら、purokやsitioは自然村と言える。この住所Togotogはsitioの

単位になる。

- (4) インタビュー対象者はボカウエ市役所で情報を得て農家を紹介してもらった。この地区は農業中心で、米は年2回獲れるが、昔は1回の収穫量が多かった。他にオクラ、ナス、トマト、チリ、ゴーヤなどの野菜を作る。この対象者は兼業としてバイクの運転手もしている。
- (5) ルソン島のカサマ制度 (kasamahan) とはタガログ語で共同経営を意味する語で、地主と小作人が生産費を共同で負担しその負担に応じて生産物を分配する制度で、日本の刈分け小作制にあたる。フィリピンでは18世紀末以後輸出用商業作物の栽培が奨励されると、所有者の明文化されていない土地の獲得競争が全土に起ったとされる (ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典の解説)。農業以外の家内小規模産業もあるが (佐竹, 1998)、ここでは土地なし労働者、小作人、小規模自作農という農村貧困層の互助関係が注目される。
- (6) マロロス市役所の農業部門で情報を得て、女性職員が農家まで同行してくれた。ここは1年に2回米を収穫しているが、米だけ作る専業農家で直接米の販売もしている。Purokの人口約200人である。
- (7) 米は年2回獲れ、この他とうもろこしを栽培している。
- (8) この農家は米を中心とうもろこし、野菜も作っている。このpurokの人口は約200人である。なおpurokとbarangayの間にあるSan Roqueはかつてのbarrioの単位とされる。
- (9) インタビューの対象者は農業技師で、お父さんが米や野菜、ゴーヤ、さとうきびを作っていた。米は現在灌漑用水が不足してやめてしまった。San cecilioはstreet名を示す。San cecilio地区の人口は約1000人である。
- (10) 農業と兼業で小口金融 (マイクロファイナンス) も行っている。年1回米が獲れるが、とうもろこしは年4回収穫している。このインタビューの対象者は畜産学の博士号をもっている。Calderaはsitioの単位でPurokの人口は約4000人である。
- (11) 年3回米が獲れるが、米の種類によって違う。インタビューの対象者はジープニーの運転手をし、バラングイの相談員で農業を担当している。Purokの人口約1000人である。
- (12) キングソロモンの人口は約400人、200世帯くらいでカンカナイ語とイバロイ語という言葉を使う。
- (13) km24はバギオから24キロの地点にあることからついた。Calikingはking of eagleの意味をもつ。km24の人口は約200人、50世帯である。牧師の両親はカンカナイ語を話す。
- (14) 中央タワングの人口は約800人、130世帯。Barangay Tawangは6つの地区から構成されている。
- (15) バランガイの人口は5886人 (2011年)、130世帯。このバラングイでは野菜 (キャベツ)、花卉 (菊)、サヨーテ (うり)、じゃがいも、コーヒー (アラビカ) を作っている。
- (16) 当日は91歳の老人の誕生日の祝いで近隣の人が集まっていた。Guitley地区は人口約300人で30世帯ほど。産業は花卉 (菊)、さとうきびである。
- (17) バランガイの人口は1392人で245世帯ほど、Purokはこの半分くらいの人口である。産業は主に漁業、フルーツ、鶏肉などである。
- (18) ブヒ湖畔Santa Elenaの人口は4149人 859世帯で、このZone3地区は人口613人である。バラングイには Zoneが8つある。産業は米、野菜で、土地は自分の土地ではなく地主のものである。

- (19) バランガイ・ミンタルの人口は約14000から16000人ほどである。調査地点として選んだ理由は戦前戦中フィリピンで最大の日本人町があったためである。このバランガイには24のPurokがある。
- (20) この相談員 (kagawad) 制度では財政、スポーツ、観光など9つの委員会 (領域) があり、このバランガイでは9つ以外の領域も設けている。選挙で選ばれる相談員の任期は3年で市民と行政をつなぐ役割を果たす。現在6人いて1人が3つの委員会を担当するが、この男性相談員は教育、女性、子供、健康、家族、若者の6つの領域を担当している。月2回バランガイ長と相談員が委員会に出席して、様々なプロジェクトの立案を相談員が行いバランガイ長に提案する。ここで政策が決まる。また住民からの苦情やその解決策についても話し合う。
- (21) Kaputian地域の人口は約32000人から35000人。バランガイの人口は4653人 (男性2396人、女性2257人)。ここの相談員は8人で担当は家族、衛生、子供、女性である。
- (22) Samaka村は60世帯くらいで、村名のSamakaはSA (Samahan) MA (Masaganang) KA (Kainan) という「豊富な食料、豊富な食事の集まり」という意味をもつ。日本の村八分に相当するものはないが、秩序を破った人には村全体で制裁を決める。本人を呼び出して忠告をして教育する。また同じことをすれば罰金を求めることもある。
- (23) このバランガイの相談員の担当は建築、環境、防災、衛生で、バランガイの人口は約2000人で7ブロックある。産業は漁業が中心である。
- (24) バランガイの人口は約2000人で400世帯、Proper地区の人口は約250人、60世帯。産業は竹が中心で、この他バナナやココナッツを作っている。
- (25) このインタビューの対象者は元船会社の総務部長で大きなマンゴ農園を経営している。バランガイの人口約3000人、400世帯で、sitioの単位であるProperの人口は約250人、60世帯。主な産業は竹、マンゴ、バナナ、ココナッツなどである。
- (26) 女性の夫も高校の先生をしている。バランガイの人口約7000人で産業は漁業、マンゴ、ツーリズムである。木が多くあった頃は石炭が産業の中心であったが、現在は観光産業に移行している。
- (27) バランガイの人口は7860人、1420世帯。産業は漁業中心で、他にトライシクロの運転手、公務員などがある。
- (28) ミンダナオ島では「請け負い」(パッキオ) 制度で、土地は地主がもっている。個人の土地を持っている人は少ない。土地は請負人に自由にさせているので、家を建てる者もいる。フィリピン経済の90%を中国人が占め、それは二世、三世の世代に移っている。中国人はフィリピン人をモノとして扱うが、日本人はヒトとして扱うからフィリピン人は日本に対して好意的である。ただし主人としての威厳を保つことは必要で、農地の雑草刈りをいっしょにすると、それなりの人間と見なされるのでしないようにしている (ダバオ日本人会副会長の話)。
- (29) このPurokの人口は約1500人、800世帯くらいで、聞き取りには60代の女性も同席した。
- (30) この女性の出身はパナイ島イロイロ市で同島近郊のCalagnaan島のBarangkalanで育ち結婚してEstanciaに住む。その後1970年頃南コタバト州のゼネラルサントス市に移り、2015年5月から今のところに住み始めた。
- (31) 60代のダバオ日本人会の会長と副会長によれば、utan (賃金、負債、債務) と言って米

やお金を借りることがあるが、米は1週間に一度20キロの米を借りる。祝い事や大きな出費があると家族や親戚が出す。地元の賃金は1日300から400ペソで、共同作業では賃金(100ペソ)を払って行くことが多い。

- (32) バランガイの人口1747人(男性944人女性803人)で379世帯ある。この地区BaybayⅢの人口は210人で43世帯いる。近くのUnisan islandも一つのsitio(529人111世帯)を構成している。産業は漁業で米も作っている。日本と同じようなモヤイ島があることを聞いてギマラス島から小さな船で行った所がこのグイワノン島(Baranngay Guiwanon Island, Nueva Valencia, Guimaras Island)であった。
- (33) 葬儀では結婚式同様料理のため牧を集める。このとき切った木から芋虫のようなものが出てくるが、これは食べられると言う。この牧師に案内され墓地にも行ったが、土葬でイバロイ族は死者の頭を東側、カンカナイ族は西側に向ける。この日たまたま葬儀があり遺体の前に親族が集まっていた。遺体は通常3日から5日後に埋葬される。
- (34) 一般的な教会の葬儀では、教会のセレモニーは小さいところで2時間くらいで大きい教会は4時間くらいかかるとされ、音楽と牧師の言葉が入ると費用が高くなる。埋葬までにお金を集めるが、亡くなってから埋葬まで2週間から1ヶ月ある。これは外国にいる人が故郷に戻れるようにするため、また埋葬までにお金を貯めるため(用立て)の期間を設けるためでもある。葬儀では普段の服で参列してもよいが、赤い服は着てはいけないとされる。学校の先生の葬儀では遺体を職場に置いた後自宅に置き、また職場を回ってから墓地に運ぶ。
- (35) 語尾のanは動詞形だが、「～し合う」意味をもつ。またsaup saupのように同じ言葉を繰り返すときも「～し合う」ことをさす。この他「…し合う」という意味でayを付けることがある。タガログ語のtulongに当たるビサヤ語のtabangにayがついたtabangayは手助けをし合うこと(助け合い)を意味する。
- (36) 今後の日本人会の方向について聞いたところ、70代が多く定年になってから来る人が多い。年金をもらっている人は生活が安定している。日本人としての「良さ」を活かして皆のよりどころとなる施設をつくりたいという希望をもっている。それは共有できるシンボルとなる施設で、介護施設でも日本的な雰囲気をもつところになりたいと言う。
- (37) タイには同様の言葉として「マイペンライ」があり、これも貧しい生活の現状をそのまま受け容れる意味をもつとされる。途上国の農民のあきらめの気持ちが示されている。日本の沖縄の「なんくるないさ」という言葉も「何とかなるさ」という意味をもち、自然な状態をそのまま容認する生活態度を示している。
- (38) 家族の中では年功序列ではなく経済力のある者の発言力が大きいとされる。子供は一番下が親の面倒を見られるとも言われる。日本人に比べると勤勉ではなく几帳面さに欠ける点も指摘されている。四季の変化に富む日本と違い、年中フルーツが実り米も4ヶ月のサイクルで獲れるため田植えと稲刈りが同時に行われるが、必ずしも管理がよくされているわけではない。ここに日本的な集団管理を導入するとよくなると考え、日本で稲刈りなどの農業体験をさせる、あるいは日本人がフィリピンで農業の技術指導をすると、グローバルな農業経営として「育成農業」となり、もっとフィリピンの農業は生産性が向上するだろう。こうした点をダバオの日本人会の副会長から聞いた。
- (39) バランガイ・ミンタルの紛争解決の処理にあたり地域の治安を守る高齢者の団体が庁舎

の2階でバランガイ長を訪問していた。筆者はここで挨拶をして、日本でもシルバー人材バンクのような組織があり、高齢者が会社を退職した後でも地域社会で活躍する機会があることを述べた。

- (40) フィリピンでは小学校と中学校で国語と社会を除いて英語で科目を学ぶ。フィリピン人がよく英語ができる理由はここにあると言える。これは聞き取り調査で訪問した住民が英語を話す点にも表れている。多様な言語社会を結びつけているのはナショナル・スタンダードとしての英語でもある。

参考文献

- 恩田守雄, 2006『互助社会論』世界思想社。
- 恩田守雄, 2012「韓国の互助慣行—日本との民俗社会学的比較—」『社会学部論叢』第23巻第1号1-44頁。
- 恩田守雄, 2013「中国農村社会の互助慣行」『社会学部論叢』第24巻第1号25-60頁。
- 恩田守雄, 2014「台湾の互助慣行—日本との民俗社会学的比較—」『社会学部論叢』第25巻第1号1-26頁。
- 恩田守雄, 2015「東アジアの互助社会—日本と韓国, 中国, 台湾との互助ネットワークの比較—」『社会学部論叢』第26巻第1号61-97頁。
- 恩田守雄, 2016『医学生のための社会学入門』晃洋書房。
- Quibuyen, Floro. 2011. "Rizal's Legacy for the 21st Century: Progressive Education, Social Entrepreneurship and Community Development in Dapitan," *Social Science Diliman*, 7(2), 1-29.
- 佐竹眞明, 1998『フィリピンの地場産業ともう一つの発展論』明石書店。
- Steinberg, David J. 2000. *The Philippines: A Singlar and a Plural Place* (Forth edition). Boulder, CO: Westview Press. 堀芳恵枝・石井正子・辰巳頼子訳, 2000『フィリピンの歴史・文化・社会』明石書店。

参考サイト

- <https://sites.google.com/site/wikangpilipino/home> (タガログ語の小辞書) 2016年7月参照